

国立国語研究所学術情報リポジトリ

プロジェクトの概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002486

プロジェクトの概要

1 プロジェクトの目的

日本語と一口にいても、その姿は実に多様です。国立国語研究所では、昭和23年（1948年）の設立以来、このような多様な日本語の資料を集めて、みんなが使えるように整備してきました。特に、各地の方言に関しては、これまで多くの資料を集め、蓄積しています。

方言は、地域の生活の中心をなすものです。したがって、なぜ、方言がこれほど多様になったのかを考えることは、各地の生活や日本の歴史がどのようなものであるのかを考えることにつながっていきます。ところが、近年、各地の方言が急速に衰退し、標準語への一本化が進みつつあります。今、方言を記録し、次の世代に伝えていく努力をしなければ、長い歴史の中で培われてきた地域の生活や文化が根幹から失われることになってしまいます。

このような背景のもと、国立国語研究所では2010年に「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」という共同研究プロジェクトを開始しました。このプロジェクトは2016年に「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」と名前を変え、内容もリニューアルして現在に至っています。プロジェクトの目的を以下にあげておきましょう。

いま、世界中のマイナー言語（規模の小さな言語）が消滅の危機に瀕しています。現在、6,000から7,000ある世界の言語のうち、半数がこの100年のうちに確実に消滅し、最悪の場合、10分の1、20分の1にまで減ると言われています。その背景には、人口の都市集中化により周辺地域の人口が減少してしまったこと、社会的・経済的理由によりマイナー言語を使っていた人々がその言語の使用をやめてしまったこと、災害や紛争により人々が生まれた土地を離れなければならなくなったことなどの状況があります。

マイナー言語の消滅に関しては、次のような意見もあります。言語の消滅は社会変化の結果であってしかたがない。あるいはもっと積極的に、言語は統一された方が便利だ。危機言語を守る必要はない。

しかし、そもそも、なぜ、言語が多様になったのか考えてみて下さい。おそらく、各地の言語は地域の自然や人々の生活、ものの考え方などに基づいて、長い時間をかけて形成されていったのだと思われます。それらが消滅するということは、長い歴史の中で醸成された人類の智慧が失われてしまうことを意味します。生物の多様性が地球を豊かにしているのと同じように、言語の多様性は人類を豊かにしているのです。

このような状況に警鐘を鳴らしたのが、2009年のユネスコの「消滅危機言語」の発表です。2,500の消滅危機言語のリストの中には、日本で話されている8つの言語—アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語—が含まれています。しかし、消滅が危惧されるのはこれだけではありません。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅

の危機にあります。これらを記録し、その価値を訴え、継承活動を支援することがこのプロジェクトの目的です。

(国立国語研究所ホームページより)

2 これまでの調査

上の目的を達成するために、このプロジェクトでは2010年度から2017年度までの8年間に以下の地域で合同調査を行い、その結果を報告書にまとめてきました。島根県隠岐の島には2015年と2016年の2回お伺いし、方言の収録と調査を行いました。この報告書は、その内容を報告するものです。

なお、これまでの調査の報告書は、研究所のホームページで公開しています。この報告書も4月以降、研究所のホームページで公開する予定です。また、☆については方言の音声をホームページで公開しています。以下のサイトで聞くことができますので、是非いちど、聞いてみてください。

調査地点と調査日

・鹿児島県喜界島方言（奄美語）	2010年9月9日～15日	☆
・沖縄県宮古方言（宮古語）	2011年9月4日～7日	
・東京都八丈島方言（八丈語）	2012年9月5日～10日	☆
・鹿児島県与論島方言（国頭語）	2012年12月1日～3日	☆
・沖永良部島方言（国頭語）	2012年12月4日～6日	☆
・沖縄県久米島方言（沖縄語）	2013年12月1日～5日	
・島根県出雲方言	2014年8月17日～21日	
・島根県隠岐の島方言	2015年11月8日～11日	
・島根県隠岐の島方言	2016年11月3日～6日	
・石川県白山市白峰方言	2017年1月20日～23日	
・愛知県一宮市木曾川方言	2017年8月27日～30日	

報告書 <https://www.ninjal.ac.jp/research/project-3/institute/endangered-languages/>
方言の音声 <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>

3 共同研究者

このプロジェクトには、全国の大学の教員や大学院生が参加しています。2018年3月1日現在の共同研究員は以下のとおりです。

研究代表者：木部暢子（国立国語研究所）

共同研究員:青井 隼人(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 / 国立国語研究所), 五十嵐 陽介(一橋大学), 今村 かほる(弘前学院大学), 岩崎 勝一(カリフォルニア大学ロサンゼルス校 / 国立国語研究所客員), 上野 善道(東京大学 名誉教授), 呉 唯(東京外国語大学大学院生), 小川 晋史(熊本県立大学), 荻野 千砂子(福岡教育大学), 大野 眞男(岩手大学), 大槻 知世(東京大学大学院生), 金田 章宏(千葉大学), 狩俣 繁久(琉球大学 / 国立国語研究所客員), 金 娥璘(九州大学大学院生), 久保蘭 愛(愛知県立大学), 小林 隆(東北大学), 小西 いずみ(広島大学), 坂井 美日(日本学術振興会特別研究員), 佐々木 冠(立命館大学 / 国立国語研究所客員), 沢木 幹栄(信州大学), 重野 裕美(広島経済大学), 下地 賀代子(沖縄国際大学), 下地 理則(九州大学 / 国立国語研究所客員), 白岩 広行(立正大学), 白田 理人(日本学術振興会特別研究員), ケナン・セリック(京都大学), クリス・デイビス(琉球大学), 友定 賢治(県立広島大学 名誉教授), 當山 奈那(日本学術振興会特別研究員), 中川 奈津子(日本学術振興会特別研究員), 仲原 穰(琉球大学), 中島 由美(一橋大学 名誉教授), 中西 太郎(目白大学), 中澤 光平(与那国町教育委員会), 西岡 敏(沖縄国際大学), 新田 哲夫(金沢大学 / 国立国語研究所客員), 野間 純平(島根大学), 原田 走一郎(長崎大学), 林 由華(日本学術振興会特別研究員), 日高 水穂(関西大学), 平子 達也(駒澤大学), 平本 美恵(シンガポール国立大学), アンナ・ブガエワ(東京理科大学 / 国立国語研究所客員), トマ・ペラール(フランス国立科学研究所), 町 博光(安田女子大学), 又吉 里美(岡山大学), 松田 美香(別府大学), 松倉 昂平(東京大学大学院生), 松森 晶子(日本女子大学), 松本 泰丈(別府大学 名誉教授), 松浦 年男(北星学園大学), 三樹 陽介(日本学術振興会特別研究員), 村上 敬一(徳島大学), ハイス・ファン・デル・ルベ(浦添市立浦添小学校), ウェイン・ローレンス(オークランド大学), ダニエル・ロング(首都大学東京オープンユニバーシティ), 山本 友美(椎葉民俗芸能博物館), 鎌水 兼貴(文教大学), 横山 晶子(日本学術振興会特別研究員)
朝日 祥之(国立国語研究所), 麻生 玲子(国立国語研究所), 井上 文子(国立国語研究所), 窪菌 晴夫(国立国語研究所), 熊谷 康雄(国立国語研究所), 三井 はるみ(国立国語研究所), 新永 悠人(国立国語研究所), 佐藤 久美子(国立国語研究所), 田窪 行則(国立国語研究所), 山田 真寛(国立国語研究所)